

ヲ格名詞句と共起する引用の「～ト」

— [-ト -ヲ] 型引用文 —

阿部二郎†

キーワード：引用句、[-ト -ヲ] 型引用文、格、補語、命題引用動詞

0 はじめに

日本語における引用表現¹⁾に以下のような、「～ト」という形式とヲ格名詞句²⁾が共起したものが見られる。

- (1) 僕は花子に「太郎が死んだ」と真実を打ち明けた。

ヲ格名詞句と共起する「～ト」に関しては後述するようにさまざまな研究がなされているが、(1)のタイプの構文に関しては先行研究があまり見当たらない³⁾。本稿では、従来あまり中心的には研究されてこなかったこの種の構文について、このほかのヲ格名詞句と共起するタイプや「～ト」が単独で用いられるタイプの文と対照しながら考察する。これによって、ヲ格名詞句と引用句、および「～ヲ+述語」の形をした文と「～ト+述語」の形をしたものの異同を説明する際の手がかりの一つとすることを目的とする。

ここで、本稿で扱う用語の定義をしておく。

砂川(1987)は以下のようなタイプの文を典型的な「引用文」としている。

- (2) [主格補語] が／は+ [引用句] と+ [引用動詞]

そして「引用動詞」は、「引用の助詞「と」をとることのできる動詞」(ibid.:p.73)と定義している。

本稿ではこれを参考に、以下のようなものを引用文の典型とさだめ、ヲ格名詞句と共起

した場合と区別する意味で「[-ト]型引用文」と呼ぶ。

(3) ([ガ格名詞句] +) [引用句] + [引用動詞] ⁴

ただし、「ガ格名詞句」や「引用句」はそれぞれ「-ガ/-ハ」や「-ト」を含めた形でこのように呼ぶ。

1 先行研究に見る引用句

述語に対するさまざまな連用成分のうち、通常は格成分すなわち名詞句が述語の必須補語となり得ると考えられる⁵。たとえば以下の(4)a では「僕は」、「花子に」、「真実を」がそれぞれ「打ち明けた」の補語となっている。また、(4)b のように補文が「ノ」や「コト」でマークされて連用成分となる場合も、これら「ノ」、「コト」は形式名詞⁶であり、補文全体を名詞として捉えることができる。

では、(4)c のように引用句が連用成分となっているときはどうであろうか。ここで、(4)d が文脈を持たない場合は、許容できない文となることから、引用句もやはり文形成の必須成分となり得ると考えられる。

- (4) a. 僕は花子に真実を打ち明けた。
- b. 僕は花子に太郎が死んだことを打ち明けた。
- c. 僕は花子に「太郎が死んだ」と打ち明けた。
- d. *僕は花子に打ち明けた。⁷

それでは、引用句はガ・ヲ・ニ格といったその他の名詞句とまったく同列に扱えるのであろうか。

以下に見る研究は引用句が「～ノ」や「～コト」と統語的な振り舞いが異なる(すなわち名詞的でない)と指摘している。

Nakau(1973)は、「～ト」で表される補文(「述語補語 (Predicate Complement)」)を含んだ文が「～コト」で表される補文(「名詞句補語 (NP Complement)」)を含んだ文とは根本的に異なった構文構造を持っていると主張している⁸。すなわち「～ト」を名詞句と考えた場合に「～コト」に適用し得るさまざまなテスト⁹が、「～ト」に適用できない

ことから、これを名詞的要素とは考えられないとしている。

柴谷(1978)は Nakau(1973)とは異なった観点からやはり「～コト」と「～ト」を異なるものとみなしている。すなわち「コト」を「補文標識」、「ト」を「引用標識」と呼んで区別し、以下に見る(5)、(6)のような¹⁰、引用句を必須としない動詞と共起する「ト」と「ばたばたと」、「のっそりと」などのオノマトペや様態の副詞の持つ性質を連続的にとらえて、「引用標識」の「と」が成す節を「副詞節」であるとしている。

(5) 「お早う。」と鈴木が入ってきた。

(6) 「ばか言へ。」と信吾は吹き出した。

このほか、益岡(1987)も名詞句以外で述語の必須補語になり得るものとして形容詞連体形と並んで引用の「～ト」を挙げ、これら「副詞的な性格を有する補足語」を「属性叙述補足語」と呼んでいる¹¹。

(7) 福沢諭吉は朝吹英二をいよいよ好ましく思ったのである。

(8) 彼は、中国の儒教をいつわりの道と考え…

藤田(1994)は以下の例を挙げて、引用の「～ト」に連体修飾をかけることができないことを根拠に、これを名詞的成分ではなく副詞的成分であるとしている。

(9) a. ガリレオは自説である地球が回っていることを主張した。

b. *ガリレオは自説である地球が回っていると主張した。

本稿ではこれらの先行研究を参考に、カテゴリーとしては引用句は文中で格成分を形成する名詞句とは基本的に異なるものであるという見方をとり、これを前提に議論を進めていく。

2 ヲ格名詞句と引用句

2.1 [-ト -ヲ] 型引用文と「ラベリング」

前節でも見たように、二つの文の間でヲ格名詞句と引用句が置換可能な場合がある。森

山(1988)は「ラベリング(名付け)」というモデルを用いて、このようなケースにおけるヲ格名詞句と引用句はそれぞれ、主文述語と意味的に同等の関係にあると説明している。

(10) a. 「南無阿弥陀仏」と 言う。

[対象]

b. 題目を 言う。

[対象]

「題目」^{名付け} → 「南無阿弥陀仏」

すなわち、(10)では b の「題目」が a の「南無阿弥陀仏」という「被引用成分」を名づけている(これを「ラベリング」と呼んでいる。)とした上で、この置換可能性から森山は「ト」をヲ格名詞句と同じく「対象格の一種」と分析している。

しかし、森山の「ラベリング」はパラフレーズな文同士においてしか説明されていない。では、両者が同一文中に共起する場合はどうであろうか。

(11) 「南無阿弥陀仏」と 題目を 言う。

[対象] ⇔ [対象]

このような場合、森山の説明をそのまま適用すれば「対象格」同士が衝突しており不適切な文になると予想されるが、実際には容認可能である。引用句を名詞的要素として他の各成分と同列に扱う場合、これがヲ格名詞句と共起する際の説明が困難になる。前節で引用句を名詞的成分として扱わないことを前提としたのはこのような理由にもよっている。本稿はこのような引用句が統語的、意味的にどのように位置づけられるのかを明らかにしていく。

ここで分析の対象となる(1)や(11)のタイプの文を「[-ト -ヲ]型引用文」と呼ぶことにする。

2.2 [-ヲ -ト]型同定文

ヲ格名詞句が「～ト」と共起する現象は前節で見た[-ト -ヲ]型引用文のほかに以下に見るようなものがある。これらは二つに分けられる。まず、何かを命名したりするタイプ

の動詞があり、以下のような例が見られる。

(12) 新たに発見されたその鳥をヤンバルクイナと名づけた。

三上(1953)や藤田(1989)は、(13)のような例を挙げて¹²この種の「ト」は基本的に文ではなく名詞にしか後接しないことなどから本稿で扱うような引用句とは区別している。そこで本稿ではこの「ト」は、それがマークする名詞を「ヲ」でマークされた名詞と同定していると見て、この種の文を「[-ヲ -ト]型同定文」と呼ぶ。

(13) *新たに発見されたその鳥がヤンバルクイナであると名づけた。

また益岡(1987)は次の例を挙げて、この種の構文をとる動詞はヲ格名詞句と引用句に語順の制約がないことを示している。

(14) 当時は象牙の塔と大学のことを呼んだ。

2.3 [-ヲ -ト]型引用文

[-ヲ -ト]型のもう一つは、ヲ格名詞句と共起せずに引用句が補語となっている文と置き換えられるタイプである。

(15) a. 山田は田中を天才だと思っていた。

b. 山田は田中が天才だと思っていた。

この種の構文に関する研究は Kuno(1976)、森山(1988)、藤田(1989)などがあるが、いずれも(15)aのような文におけるヲ格名詞句は b からの「引用成分の繰り出し¹³」という説明を与えている。つまり、これらの研究は(15)aにおける「～ト」を引用的成分とみなしている点で見解が一致している。そこで本稿では(15)aのような文を「[-ヲ -ト]型引用文」と呼ぶことにする。

この種の文には語順に制約が見られる。すなわち [-ト -ヲ]の語順にすることができない。益岡(1987)に以下の例が見られる。

(16) *彼はいつわりの道と中国の儒教を考えた。

益岡は、このように [-ヲ -ト] 引用文と [-ト] 同定文とを語順に関する性質からも区別している。

3 他の構文との関わり

3.1 [-ト -ヲ] 型引用文と [-ト] 型引用文

前節に見たように [-ヲ -ト] 型におけるヲ格名詞句は引用句からの「引用成分の繰り出し」と考えられている。これと関連するが、阿部忍(1991)は [-ヲ -ト] 型引用文は、[-ト] 型引用文と意味的に密接な関わりを持っていると分析している。すなわち [-ヲ -ト] 型は統語的にはヲ格名詞句と引用句が同じ主文述語の補語となっているが、主文述語と意味的に密接な関わりを持っているのは「～ト」すなわち引用句の方であると主張している。つまり「花子」は「を」によって連用成分となっはいるのであるが、この名詞句は「思う」によって意味的に直接支配されているわけではないという。

(17) a. 太郎は花子を天才だと思っている。

b. *太郎は花子を思っている。

阿部忍は、ここから更に本稿で言う [-ヲ -ト] 型引用文と [-ト] 型引用文を独立した構文として扱わなくても、一方が他方から派生したものであると考えることで一般化してとらえることができると述べている。

[-ト -ヲ] 型においてもこれが独立した構文ではないという見方はできないであろうか。次節では [-ト -ヲ] 型についてこの観点から分析を進める。

3.2 [-ト -ヲ] 型引用文と [-ト] 型引用文、および非引用文

例文(10)、(11)から順序を逆にして考えると、[-ト -ヲ] 型引用文は、引用句とヲ格名詞句のどちらかを残して片方だけを任意に省略できる、という性質を導き出すことが一見できそうである。

この仮説をの裏づけとして、以下のような現象を分析する。

(22) a. 僕は花子に「太郎が死んだ」と真実を打ち明けた。

b. ??僕は花子に真実を「太郎が死んだ」と打ち明けた。

b の許容度が下がるのは、a が引用句によって「真実を言った」という事象が修飾されているのに対して、b は事象の参与者であるヲ格名詞句よりも内側すなわち述語に近い位置に、意味的にはこれを外からまとめて修飾している引用句が入り込んでしまっているからと考えられる。

4 補語としての引用句

4.1 引用文と非引用文の接点

前節では [-ト -ヲ] 型引用文が [-ト] 型引用文とは基本的に異なるものであるということ仮説(20)によって示したが、以下の現象はこの仮説だけではとらえきれない。

(23) a. 僕は花子に「太郎が死んだ」と真実を打ち明けた。

b. 僕は花子に「太郎が死んだ」と打ち明けた。

前節では [-ト -ヲ] 型引用文が必ずしも [-ト] 型引用文とパラフレーズな関係とはならないことから仮説を導き出したわけであるが、今度は逆に両者がパラフレーズな関係にあるので一見仮説と矛盾が生じるように見える。しかし、[-ト] 引用文において引用動詞の補語となっている引用句について考察を進めることで、これが矛盾ではないことを本節で示す。

奥津(1970)は、以下の規則(ibid.:p.5)を示して、本稿で言う引用句の内容を二種類に分類している。

(24)

$$Q \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{Sungram} \\ \text{Sgram} \end{array} \right\}$$

奥津によれば、“Q”は引用の内容、“Sungram”は非文法的な文、“Sgram”は文法的な文をそ

れぞれ表している。

これを参考にして、冒頭に定義した引用動詞を「一般引用動詞」と「命題引用動詞」の二つに分類する。

(25) 一般引用動詞 : あらゆる引用句を補語とすることができるタイプの引用動詞

命題引用動詞 : 文法的文を内容とする引用句だけを補語とすることができるタイプの引用動詞

一般引用動詞としては「言う」、「書く」などがその典型としてあげられる。一方命題引用動詞は「考える」、「判断する」、「説明する」などがある。

ここから先ほど挙げた(18)c、(19)cになぜ許容度の違いが出るのかを説明する。

(26) a. 僕は花子に「太郎が死んだ」と打ち明けた。

b. ??僕は花子に「実はね…」と打ち明けた。

「打ち明ける」という動詞が文を成すとき、この動詞が表す事態に根本的に関与するのは、発話を行う者とこれを聞く者および、発話者から聞き手に伝達されるものの三者と考えられる。このとき、この「伝達されるもの」は単なる音声以上のもの、すなわちある種の意味を持ったひとまとまりの情報とでもいうものである。これを「命題」と呼ぶなら、「打ち明ける」が表す事態には必ず命題が参与する必要がある、と言い換えられる。

「打ち明ける」はこれが意味的に要求する発話者、聞き手、命題の三者それぞれを名詞句としてとって、以下のような文をつくる。

(27) a. 僕は花子に太郎が死んだことを打ち明けた。

b. 僕は花子に真実を打ち明けた。

a の「太郎が死んだこと」というのは命題そのものであるが、この命題の内容が問題とならないときは、これを命題であることを示す指標となるような別のものに置き換えて b のようにすることもできる。いずれにしても、動詞「打ち明ける」はガ・ニ・ヲという三

つこの格の名詞句をとる、と一般化することができる¹⁴。

ところが、この動詞が引用句と共に起ると、ガ・ニ・トとなって先の一般化が適用できなくなる上に、前述したように引用句が名詞句とは異質なものであるということも問題となる。しかし、引用句が本来統語的にヲ格が占めるべき場所を意味的に補完している、と考えることによってこの一般化を保つことができる。

具体的には、「～ト」によって示された引用句の内容が文法的な文である場合、これは命題を含んでいる¹⁵から、これが動詞の要求する命題へと推論されるわけである¹⁶。このように、この種の命題を要求する動詞は命題引用動詞となりうる¹⁷。

「打ち明ける」は（意味的に）命題を要求しているのであるが、(26)b は引用句の中にも命題とおぼしきものがない。ここで意味的な欠落が生じ、この文は不自然に感じられる。一方で(19)a のように、引用内容が非文法的である引用句が一見命題引用動詞の補語となっているような文が存在することは(21)a のような構造をしていると考えることで説明できる。引用句が(21)a にあるような位置にきた場合、それはすでに動詞の直接的な補語ではなくなっている。述語が引用動詞である以上、引用句との相関を完全に否定することはできないかもしれないが、必須補語が名詞句によって占められている以上、この場合の引用句は副次的な補語程度にしか考えられないであろう。

このように、「～ト」という同じ形態を有しながら、動詞との相関が強まったり弱まったりするというのもこれが名詞的でない、更には動詞のとる格の体系からもはずれた存在であることの現れと考えることができるであろう。また、いずれの場合も引用句に発話・表記・思惟の様態といった意味が介在しているのも注目に値する。

4.2 引用内容と命題に関する補足 一引用文と非引用文の研究に向けて一

ここまで、[-ト] 引用文と「ヲ格名詞句+述語」の形をした文については、冒頭で定義した「引用文」であるか否かという形態的な側面から区別してきた。前節では、それまで基本的に異なると見てきたこれら二つの構文について、引用句による意味的補完という説明を用いてその接点を示した。しかし、この意味的補完ということは二つの文が完全にパラフレーズな関係にあることを含意するものではない点に注意する必要がある。

砂川(1988b)は引用句と名詞句の違いを表すものとして以下の例を挙げている(ibid.:p.83)。

(28) a. 太郎は花子には会わなかったと否定した。

- b. 太郎は花子に会ったことを否定した。
- (29) a. 太郎は花子に会わなければよかったと後悔した。
- b. 太郎は花子に会ったことを後悔した。

いずれの場合も、a と b は文全体で同じことを指しているにもかかわらず、「引用句と名詞句の内容が全く反対の事柄を示している」(ibid.:p.83)。

このように、引用はあくまで「実物表示」であり、そこから推論される命題がどのように補完されるかは動詞との相関によって決まってくると予想される¹⁸。また [-ト -ヲ] 引用文における引用句とヲ格名詞句との意味的相関についても動詞との関わりが関係しているようである¹⁹。これらの点に関しては予想にとどまっていた、詳しい分析は現段階ではまだ行っていない。

まとめ

本稿では [-ト -ヲ] 型引用文について分析を行った。その結果、これは一つの独立した構文と見るよりは「ヲ格名詞句+述語」の形をした非引用文と見るべきであることを示した。

また、[-ト -ヲ] 型引用文は主文述語となっている引用動詞の種類によっては [-ト] 形引用文にすることができることも示した。すなわち、述語が一般引用動詞であれば、いかなる場合も [-ト] 型引用文となり²⁰、命題引用動詞であれば、条件付きで [-ト] 型になる。

引用内容については、とりあえず文法的であるか否かという区別を行ったが、これではまだ説明しきれない点が少なからず残されている。この点については目下検討中ではあるが未整理のため別の稿に譲りたい。

引用句と動詞との意味的な相関についても、できる限り網羅的に研究を進めたいと思う。

参考文献

- 阿部忍 (1991) 「認識動詞構文の構造と格」 『待兼山論叢』 25 大阪大学
阿部二郎 (1996) 「文の名詞化と引用句」 筑波大学 修士論文
フィルモア, チャールズ J. (1975) 『格文法の原理』 田中春美・船城道雄 訳 三省堂
藤田保幸 (1986) 「文中引用句「～ト」による「引用」を整理する」 『論集日本語研究 現代編 (一)』
宮地裕編 明治書院
——— (1988) 「「引用論」の視界」 『日本語学』 7-9

- (1989) 「「名づける」「呼ぶ・いう」の引用論(一・二)」 『詞林』5,6 大阪大学古文中世文学研究会
- (1994) 「引用されたコトバの記号論的位置づけと文法的性格」 『詞林』16
- (1996) 「文法論の対象としての「引用」とは何か」 『詞林』20
- Kuno, Susumu (1976) *Subject Raising. Syntax and Semantics Vol.5: Japanese Generative Grammar*. Shibatani, M. ed. Academic Press.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法 一日本語文法序説一』 くろしお出版
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』 刀江出版
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- Nakau, Minoru (1973) *Sentential Complementation in Japanese*. Kaitakusha.
- 奥津敬一郎 (1970) 「引用構造と間接化転形」 言語研究 56
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』 大修館
- 砂川有里子 (1987) 「引用文の構造と機能」 『文藝言語研究 言語篇』13 筑波大学 文芸・言語学系
- (1988a) 「引用文における場の二重性について」 『日本語学』 7-9
- (1988b) 「引用文の構造と機能(その2)」 『文藝言語研究 言語篇』14 筑波大学 文芸・言語学系
- 寺村秀夫 (1981) 「モトとコト」 『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』 大修館
- (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版

本文註

[†] abejiro@lingua.tsukuba.ac.jp

- ¹ 日本語における「引用表現」のさまざまな類型については藤田(1988,1996)が詳しい。
- ² 本稿では名詞句に格助詞が後接して運用成分となっているものを「～格名詞句」と呼ぶ。
- ³ 藤田(1986)にこの種の例が見当たるが、これらを独立して詳しく扱っているわけではない。
- ⁴ 砂川(1987)では「主格補語」の有無が議論の焦点となっているが、ここではその有無に関してはあまり問題とならないため、「ガ格名詞句」に括弧を付けている。
- ⁵ たとえば寺村(1982)を参照。
- ⁶ 形式名詞については寺村(1981)を参照。
- ⁷ 以下文法的でない文を*で、許容度にゆれがあるものを??で表す。
- ⁸ 「述語補語」、「名詞句補語」は筆者の訳語。
- ⁹ Nakau(1973)はテストとして、主題化(Topicalization)、分裂文化(Cleft Formation)、名詞句削除(NP Deletion)、「ソレ」代名詞化(Sore Pronominalization)、そして主語・目的語倒置(subject-object Inversion)を行っている。
- ¹⁰ 例文は柴谷(1978)。
- ¹¹ 例文は益岡(1987)。
- ¹² (13)は藤田(1989)のもの。
- ¹³ 「引用成分の繰り出し」は森山(1988)の用語。Kuno(1976)は「主語繰り上げ(Subject Raising)」と呼ぶが、現象としては同一の物を指す。
- ¹⁴ 動詞ごとの格パターンを抽出するという研究は数多くあるが、ここでは益岡(1987)を参考している。
- ¹⁵ たとえばフィルモア(1975)は以下のような規則をたてて文を命題とモダリティからなるものとしている。ただし、Sは文、Mはモダリティ、Pは命題を表す。

$$S \rightarrow M \wedge P$$

- ¹⁶ 藤田(1994)は引用句の内容は「実物表示」であって、通常の言語記号とは異質のものであるとしている。本稿ではこれを踏まえて物理的なものとしてのコトバから意味的抽象的なものを推論する、という意味で「推論」という用語を使っている。
- ¹⁷ ただし、「暗示する」などはそもそも引用句を補語としてとりえない(つまり引用動詞ではない)ので、動詞が命題を要求するからといって命題引用動詞であるとは限らない。砂川(1988a)は「「～こと」しか取れない動詞」として「失念動詞」、「暗示動詞」という非引用動詞群を挙げている。

¹⁸ 註 15 参照

¹⁹ 草薙裕氏、竹沢幸一氏による指摘。

²⁰ ただし、「思う」などの場合はヲ格名詞句を補うのが困難なため、「-ト」型引用文から [-ト -ヲ] 型引用文という方向は必ずしも成り立たない。